
フローベールの「黒い太陽」

——実人生から作品へ——

沢崎久木

〈明治学院大学〉

Résumé

Il est presque établi que Flaubert a prêté sa propre expérience de l'hallucination à son héroïne dans le chapitre 8 de la troisième partie de *Madame Bovary*. Nous examinons la genèse de cet épisode et d'autres brouillons pour savoir comment Flaubert en est arrivé à utiliser sa maladie dans le roman, l'écrivain qui refusait toujours de mettre sa propre personnalité dans son oeuvre. Avant de rédiger cet épisode, il a essayé dans d'autres épisodes d'insérer cette hallucination des « papillons noirs », et d'un autre côté d'introduire la métaphore des « soleils noirs » qui désigne les yeux de l'amant. C'est en traversant ce cliché romantique qu'il a enfin réussi à donner une forme artistique aux faits autobiographiques.

1853年3月、ギュスターヴ・フローベールは恋人ルイズ・コレに宛てて、1844年の自分の癲癇の発作について、次のような手紙を書く。

それにこの神経の病気のおかげで、誰も想像できない、いや、誰も感じたことのない、興味深い心理現象を体験することができました。いつの日かこれを本の中で（あなたに話したことのある形而上的な幻の出てくる小説で）使って、敵を取ってやりましょう。でもそれは、精神衛生上、私にとって怖い主題なので、時節を待たなければなりません。その印象から遠ざかって、人為的に理想的にそういう印象を作り出すことができるまで。私にとっても作品にとっても危険がなくなるまで。¹

フローベールはここで、自分の個人的な経験を作品の中で使う意図を表明している。この「形而上的小説」とは、ジャン・ブリュノーの註によれば、先立つ1852年5月8日付けのルイズ・コレ宛の書簡で言及されている『螺旋』であるとのことで、「いつの日か」「待たなければならない」などの言葉から、この「敵討ち」がそう近くもない将来を考えているような印象を受ける。

しかし、よく知られているように、フローベールはこの発作の体験を、当時執筆中だった『ボヴァリー夫人』の中に書き込んでいる。第三部第8章、エンマは最後の金策にロドルフを訪ね、拒絶されてロドルフの館を飛び出す。ヨンヴィルに戻る道中の一節はこう書かれている。

頭の中にあつたもの全てが、漠とした記憶も、考えも、同時に、一度に、打ち上げ花火の千のかけらのように、飛び出した。[…]

1 Gustave Flaubert *Correspondance*, édition de Jean Bruneau, « Bibliothèque de la Pléiade » (以下『書簡集』と略), tome II, Gallimard, p. 290, le 31 mars 1853, à Louise Colet.

夜になった。カラスが飛んでいた。

突然火の色をした小球が、空中に銃弾のように炸裂して平らになり、くるくるまわって、木々の枝の雪の上で溶けた。(pp. 456-457)²

小説のこの部分がフローベールの実体験に基づいているということは、後年のイポリット・テーヌ宛ての書簡との類似などから、ほぼ定説となっている。³

頭の中にあるものがすべて同時に、打ち上げ花火の千のかけらのように炸裂するようで、荒れ狂って通りすぎるそういう頭の中のイメージをいちいち見ている暇もありません。—また別の状況では、ひとつのイメージから始まって、それが拡大し広がって、最後には客観的現実を覆ってしまう。例えば飛び交う火花が大きな炎になるようなものです。[…] これはいわゆる「黒い蝶」、つまりある種の人々には、曇り空で目が疲れているときにサテンの丸い薄片が宙に浮いているように見えることがありますが、それにそっくりです。⁴

『ボヴァリー夫人』について「完全に作り話で、自分の感情や実人生はまったく入れていない」⁵と断言しており、作家が自分の実人生を作中に取りこむことをひどく嫌ったことは有名だが、そのフローベールが、実体験から出発して、どのように、先に引用した小説中の一節のような芸術表現に至ったか、その過程を一度丁寧に検証してみる必要があるのではないだろうか。

冒頭に引用した書簡の文面が与える印象とは異なり、フローベールは執筆中の『ボヴァリー夫人』の中で、冒頭に引用した第三部第8章に至る以前に、またこのルイーゼ・コレ宛の手紙が書かれる以前にも、すでに何度か自分の病気の体験を小説中に書きこもうと試みている。例えば第一部第9章、舞踏会のあと、エンマが招待客の一人子爵の思い出を反芻する様子が描かれているが、この部分の、かなり早い段階の草稿余白には以下のように書かれている。

そして子爵の姿が時折通り過ぎた、美化されて彼の何がしかを跡に残しながら、彼女の想像で飾られて。彼女の夢一杯に広がって。神経症で黒い〈青い〉蝶になやむ人なら彼女が感じていることがわかるだろう。ときどき、雨模様の天気のと、〈同心円状の波紋のある〉青い円盤の中に、〈光り輝く〉金色の点が、音のしない砲弾のようたのよう炸裂するのが見えるのである。⁶

天候条件、一般的な神経症なり「黒い蝶」という眼病（日本語では「飛蚊症」と呼ぶらしい）なりに還元する言い方、など、先のテーヌ宛書簡の引用末尾部分は、この草稿とそっくりと言ってもよい。

この稿はこうして余白に書きつけられたきりでその後の展開を見せずに消えるが、同じ「黒い蝶」現象は第二部第6章、エンマが晩鐘を聞いて教会に懺悔に行く場面の草稿に現れる。

〈〈そして〉エンマは頭の中に、周囲に立ち込めている以上の静寂を感じた〉色付きの円が〈軽い〉輪のように隅の方の、影の中で回転した、円盤のように回転していた〈正面で、彼女の前で、目の前の正面

2 『ボヴァリー夫人』決定稿からの引用は、*Madame Bovary*, édition de Jacques Neefs, Le Livre de Poche « classique », 1999 による。以下文中に頁数と、必要に応じて部・章を記す。

3 例えば Gothot-Mersch によるクラシック・ガルニエ版(1971)の註106参照。

4 『書簡集』III, p. 572, le 1^{er} décembre 1866, à Hyppolyte Taine.

5 『書簡集』II, p. 691, le 18 mars 1857, à M^{lle} Leroyer de Chantepie.

6 Ms.g223-1 f°244. 転記記号は以下のとおり：加筆部分は〈…〉、難読部分は*…*、解読不能部分は***、削除部分は消し線で示す。〈(左余白) …〉は紙の左側の余白に書きこまれていることを示す。

で) *黒い* (黒い) 小球が目の前で <***> の中で静かに音もなく、炸裂し、雲紋のある (暗い黒い雲紋のある) 円盤のように広がり、火の色の輪のように回転し、<*ゆっく〜り*> 花壇の上に降りて行き、互いに火の色の輪を重ね合いながら―そして消えて行った<大きくなった>―鐘の音が続いていた<相変わらず響いていた>。⁷

この一節が草稿中に現れるのは推敲のかなり進んだ段階で、幻覚の描写は、セナリオなどの準備的な段階を踏まえず、いきなり上記のような形で現れ、この稿の推敲の結果は次の(最後の草稿にあたる)稿に書き写されるが、自筆決定稿には採用されない。

書簡などから執筆年代を推定すると、第一部の最後のあたりを書いていたのが1852年初夏、第二部の教会のエピソードを書いていたのが53年春、先のルイーゼ・コレ宛の書簡が書かれたのは、この二つのエピソード執筆の中間に位置することになる。書簡の中の「精神衛生上怖い」、「自分にとっても作品にとっても危険」などという言葉は、頭の中で考えただけでなく、実際の執筆に基づいた感想であり、「いつの日か本の中で使う」、というのも、遠い将来のことを漠然と考えているわけではない。また、生々しい実体験の印象から十分に遠ざかり精神衛生上問題なく使用できる時節を、漫然と待っていたわけではないことがうかがわれる。

さて、1855年初秋、執筆中の小説も大詰めに差し掛かって、フローベールはもう一度、この幻覚を作品中に盛り込もうとして、結果的にはそれがようやく成功することになる。先に引用した服毒直前の部分である。このエピソードの生成過程には先の二例とは明らかに異なる点がある。ひとつは、飛蚊症を描くというアイデアが、原稿執筆中に突発的に現れてすぐ消えた前二回と異なり、今回は構想の段階から、幻覚体験を作品中に書きこむことは予定されている。セナリオの中に、

雪解け<黒い太陽が回転し<真中に>ロドルフの顔が現れる。>―砒素を盗む。決断⁸

とある。ここでも「黒い蝶」現象を扱っていることは明らかである。この行間の書きこみは、セナリオの次の稿にも継承される。構想から原稿執筆に移った最初の段階では以下のように展開される。

突然彼女の***神経の動揺の結果、円盤が<そして興奮した神経の<***>幻か<×***>>黒い<緋色の>太陽がいくつも目の前で***踊り***-回転しながら、降りてくるように見えた-それぞれの中に真中に***メダルの顔*画像*のようにロドルフの顔<が現れた>-それらは大きくなり、<***>、数を増やし、近づいた。

<(左余白)初めは***宙に浮かぶ火花が、爆弾のように炸裂し、平らになってくるくる回転して雪の上に<まだ><<あちこちに>木々の大枝に>残っている雪の上で溶けていった。>⁹

相違の第二点は、同じ幻視体験を題材としながら、この第三部第8章では先例にあるような「円盤」、「輪」、「球体」などの、形状を示すだけのいわば抽象的な言葉ではなく、セナリオの段階から原稿執筆の初期段階にいたる過程まで、「太陽」という暗喩が使われていることである。なぜここでは「蝶」でも「円盤」でもなく、「黒い太陽」なのだろうか。

小説中、空に輝く本物の太陽は何度か登場するが、比喩としての「黒い太陽」に該当する表現を探すと、次

7 Ms.g223-2 f°262v.

8 Ms.gg9 f°35.

9 Ms.g223-6 f°245v.

のような一節があった。第二部第8章、農業共進会の場面で、夏の炎天下、エンマがロドルフの甘言に幻惑されるくだりである。

彼の目の中に、黒い瞳孔の周囲に金色の光線が発散しているのが見えた。髪を光らせているポマードのにおいすら感じられた。(p. 245)

ロドルフの瞳は黒く、かつ金の光線を発している。この一節の草稿の中では、はっきり「太陽」と書かれている。

〈(左余白) 彼女は彼の目の中に見た〉小さい金の光線が彼の黒い瞳〈瞳孔〉のまわりに太陽のように発散しているのが見えた〈発していた〉¹⁰

もうひとつの「黒い太陽」の例は、決定稿では第二部12章に相当する、シャルルが娘ベルトの幸せな将来を空想するかたわらでエンマが愛人を夢見るエピソードの草稿では、ロドルフの目ははっきりと「黒い太陽」に喩えられている。

〈そう言うわけで〉〈そう言うわけで〉〈そんな風に〉彼女は、〈ふたつの〉〈ふたつの〉黒い太陽のように彼女の目にそそがれて輝いているその〈ふたつの〉〈ふたつの〉目を思い浮かべた。¹¹

この同床異夢のエピソードの生成過程は、小説中最も複雑で長いもののひとつで、¹² 執筆開始前のセナリオでは、このエピソードは小説第二部の前半、レオンがパリに旅立つ前の、いわゆる「レオン I」の中に位置しているが、¹³ 原稿執筆の早い段階ではエンマとロドルフの蜜月時代に現れ、何度も改稿された末削除され、最終的には決定稿に見られるように駆け落ち直前のエピソードとなっている。上に引用したのは移動前の段階、ロドルフとの関係が始まったばかりの頃を描いている草稿である。

ここでは「黒い太陽」のようなふたつの目は、単に心の中で静かに思い浮かべられるだけで、炸裂して宙を舞ったりはしない。飛蚊症的な幻覚として描かれているわけではないのである。しかし、この草稿でも、少し後にエンマの夢の中にもロドルフの顔が現れ、テーヌ宛の書簡に描かれている幻覚と同様に、また、小説大詰め近くの狂乱の場面とほとんど同様に、女主人公を圧倒する。

彼女の人格の意識はそのイメージに占領されて消えてしまうほどだった。－しかしロドルフの顔はだんだん近づいて大きくなり、そして〈ついに〉彼女の前に〈彼女の前に〉生きた彫像のように亡霊のようになり、生き生きとしていながらじっと動かずに居座った。¹⁴

草稿に描かれているこの蜜月時代の「黒い太陽」の例は、小説中女主人公がもっとも幸福な時代の夢であり、別に狂気の発作というわけではないのだが、フローベールがテーヌ宛書簡で説明している「記憶の病」¹⁵ であることにはかわりない。小説大詰めの執筆に取りかかる直前に作られたセナリオに作家が「黒い太陽」と書くとき、作家自身の幻覚体験と同時に、執筆中の小説の、すでに書き終え(削除し)た部分で描いたロド

10 Ms.g223-3 f°176v.

11 Ms.g223-3 f°299.

12 このエピソードの生成過程については、Marie Durel によるルーアン大学提出(2000年)の博士論文 *Classement et Analyse des brouillons de « Madame Bovary » de Gustave Flaubert* に詳しい。

13 Ms.gg9 f°10.

14 Ms.g223-3 f°299.

15 「それから雷に打たれるように突然に、記憶が殺到する、と言うより一瞬のうちに反乱する。幻覚とは、少なくとも私にとってはそれ以外の何物でもありません。それは記憶の病気、記憶が隠し持っているものを吐き出すことなのです。」「書簡集」III, p. 572.

ルフの瞳が想起されていたことはほぼ間違いないと言えよう。二人の関係の初め、農業共進会の折に、エンマはロドルフの瞳に（顔の中に）太陽を見、そしてその関係が終結するとき、今度は逆に黒い太陽＝瞳の中にロドルフの顔を見るのである。¹⁶

さて、ではロドルフの瞳＝「黒い太陽」という比喩はどこからきたのだろう。

「黒い太陽」と言えばネルヴァルの詩集『シメール』中の「廃嫡者」の

私の唯一の星は死に、星をちりばめた私のリュートは黒い太陽を持つ¹⁷

という詩句が思い出される。他にユーゴーとボードレールの例を見つけたが、時間の関係で、一番影響関係が濃いように思われるネルヴァルの例を検討するに止める。ネルヴァルは同じ詩集の中の「オリーブの園のキリスト」で、「神の目」のかわりに「大きな黒い、底無しで、夜が住み、そこから世界を照らす […] 眼窩しか見えなかった」と書いており、複数の評者がこの黒い眼窩と「廃嫡者」の「黒い太陽」との近似を指摘している¹⁸。ネルヴァルにおいても「黒い太陽」＝「目」なのである。

日付の問題は微妙である。『シメール』が出版されたのが1854年1月で、その頃フローベールは農業共進会の章は書き終え、「恋人たちの蜜月」を書いている最中である。¹⁹ ロドルフの瞳＝太陽という構図は農業共進会の章ですでに出来上がっていて、それが夢想や狂気の中でエンマを圧倒する「黒い太陽」の幻想に転ずるのに、ネルヴァルの影響があっただろうか。

フローベールがネルヴァルの詩に影響を受けた可能性を示唆する証拠はフローベールの書簡からは発見できなかった。が、「廃嫡者」にある「星をちりばめたリュート」に酷似した表現が第三部第6章に相当する部分の草稿に見られる。エンマがレオンに幻滅して、どこかに理想の恋人がいないものかと考える、その理想像の描写で、決定稿では「天使の姿に詩人の心を持つ、天に向けて哀調を帯びた賀歌を奏でる鋼の弦の堅琴」(p. 421) となっている一節は、ある草稿にはこう書かれている。

天使の体に詩人の心、鋼の弦の星をちりばめた〈縁取られた〉堅琴〈(左余白) 天に向けて哀調を帯びた賀歌を奏でる〉²⁰

しかし、恋人の瞳を太陽に喩えるのは格別独創的な比喩とも思えないから、他に出典があるか、あるいは、フローベールがまったく独力で考え出したとしても不思議はない。ネルヴァルの詩の影響は、むしろ類似を避けるために「黒い太陽」という言葉を原稿から削除する方向に働いたかもしれない。

あるいはまた、この恋人の瞳＝黒い太陽という比喩は、少なくとも農業共進会や同床異夢のエピソードの中(セナリオでは「詩的な状態」«*état poétique*»²¹と書かれている状態)では、ロドルフに恋する自分を、本の中の不倫の恋に身を焦がすヒロインたちに重ね合わせているエンマ自身²²の言葉、またはエンマが何かの本

16 『聖アントワーヌの誘惑』と同様に円の中の顔がひとつの終焉のイメージであることを指摘しておく。『ボヴァリー夫人』の中では、シャルルは、物語の中心をエンマに譲るとき、彼女の瞳の中に自分の姿を見る (p. 95)。ロドルフがエンマとの関係を終らせようと決意して、肖像画の中のエンマを見る (p. 313)。

17 Jacques Bonny dans son édition des *Filles du feu. Les Chimère*, GF Flammarion, 1994. 訳文は篠田知和基訳『ネルヴァル全詩』(思潮社、1981年)を参照した。

18 例えば前掲書の註 p. 406.

19 『書簡集』II, p. 512, le 18 janvier 1854, à Louise Colet.

20 Ms.g223-4 f°55v.

21 Ms.gg9 f°25v, f°28.

22 「そして彼女は以前読んだ本のヒロインたちを思い出した。そうした不義の女たちの抒情的な一群が、彼女の記憶の中で声をそろえて歌い出し、彼女を魅了した。彼女自身も空想世界の一部となって、娘時代に長いことあこがれていた夢がようやく実現したのだ。自分も今や、かつてあれほど羨んだ恋する女のタイプのように思われる。」(p. 266)

で読んだ比喩の、エンマ自身の（無意識の）引用として書き込まれたのかもしれない。

いずれにせよ、第三部の狂乱の場面でも、先に引用した草稿とそれに続く版で、「黒」という色彩も「太陽」という言葉も次第に削除される。削除された経緯には、詳細には立ち入らないが、「夜になった。カラスが飛んでいた。」という一文が、この第一稿で、決定稿に見られる位置、ふたつの幻覚の中間、ロドルフの顔の幻覚の直前に移された。フローベールはおそらく、同じ病気を病む者として、エンマの幻覚に、「科学的」説明（黒い鳥を黒い太陽と見間違えた、というような解釈）の余地を与えなかったのかもしれない。が、結局はこの同じ第一稿で、太陽の色を黒から緋色に変え、黒いカラス＝黒い太陽という解釈の可能性を排除した。小説のサスペンスを配慮したのか、奇怪な現象の種明かしの可能性は、女主人公が幻想から覚めた後に、提示することにしたのだろう。すなわち、エンマは我に返って宵闇の中にヨンヴィルの町の灯を見る。火の玉と思われたのは実は単なる家々の明かりだったのだ、という解釈の余地が残される。

推敲の結果最終的には、「黒い太陽」という表現は、晩鐘のエピソードの中で用いられた「火の色の」「小球」という表現に取って代わられる。晩鐘のエピソードの中でいったん削除された表現に立ち戻ったわけだが、結果として今回は、無論厳しい推敲の末、この一節は削除されず、最終稿まで生き残り、発表され出版されることになる。53年3月の書簡にある、「本の中で使う」企画は成就したわけである。

53年3月31日付の書簡から隔たること執筆時で二年半、（読みなおして削除しないことを決意した時点を考えて）出版時で三年、「待つ」、「遠ざかる」と書かれていた書簡が与える印象からすると短いような感じがしないでもないが、その間、病的な幻覚とはあまり関係ない、恋の初めや蜜月時代のエピソードの中で、「黒い太陽」という比喩を導入し、削除した。そして、エンマが服毒に至るエピソードに、一旦削除した恋人の瞳＝太陽の比喩を、「黒い蝶」現象と結びつけて復活させた。この、いわば文学的ロマン派的常套句を、通過し消化することによって、自伝的な「黒い蝶」現象を、「人為的に」、「理想的に」表現することが可能になったのではあるまいか。時間的にはそれほど遠ざかってはいないが、いわば他人の言葉を通すことによって、客観的に作品化することができたのだろう。後年テーヌに自分の幻覚体験を説明する書簡で、フローベールは『ボヴァリー夫人』を引用しているのではないかと思われるほど、小説と酷似した表現を使っているのは、自分の体験を文学表現として、昇華・定着することに成功したからではないだろうか。

削除された「黒い蝶」という比喩も、恋人の瞳と黒い太陽を結び付け、さらにその黒い太陽を飛蚊症の幻覚と結びつけた『ボヴァリー夫人』執筆のほぼ全期間を覆う推敲過程は、決定稿ではその痕跡すら残っていないが、決して書き損じの紙束の中に埋もれてしまったわけではない。恋人の燃える瞳＝黒い蝶が浮遊するという幻は、1869年の『感情教育』第二部第1章の最後、ロザネットの仮装パーティーの後の場面で、ほとんどそのままの形で描かれることを最後に指摘しておく。²³

そして、寝入り端の幻に、彼はポーランド女の肩 […] が次々と通り過ぎるのを見た。それから、舞踏会にはいなかった二つの大きな黒い目が現れた。蝶のように軽く、松明のように燃えて、目は行ったり来たり、ゆらめきながら、天井の蛇腹の方にのぼり、彼の口元まで降りたりした。²⁴

23 1864年から書き始められたこの小説が、1866年12月付のテーヌ宛の手紙が書かれた時点で、どこまで書き進められていたかさだかではないが、前後の書簡から推測すると、どちらが先にしても、かなり近い時期に書かれたのではないと思われる。1867年3月17日にフローベールは、「復活祭までに [第二部] 第3章を書き終えたい」と書いている（『書簡集』III, p. 617, à Jules Duplan）。

24 *L'Éducation sentimentale, Histoire d'un jeune homme*, édition de Claudine Gothot-Mersch, GF Flammarion, 1985, p. 183–184.

質疑応答

ジゼル・セジャンジュール フローベールが、ネルヴァルの『廃嫡者』を読んでいたかも知れないということですが、書簡の中にはこれを読んでいたという確証は実際にはないわけです。しかし、フローベールはゴーチエと関連が深く、ゴーチエはネルヴァルに関連が深いわけですから、『廃嫡者』を読んでいたということは大いにあり得ると思えます。

沢崎久木 ご指摘ありがとうございます。

橋本知子 「黒い太陽」が語られるときには、メランコリーがすぐに思い浮かびます。メランコリックな詩人というのは、この時代に広く共有されたイメージであると思います。

沢崎 はい、まったくご指摘の通りであると思います。

橋本 堅琴というのが、詩人のメタファーなので、堅琴、それから「黒い太陽」というのは、神なき後なのです。ロマン主義時代の、ほとんどクリシェになったメランコリックな詩人というイメージで、当時一般的に言われていたイメージなのですけれども。さらに、『感情教育』における「黒い蝶」のことなのですが、第一部第5章の前＝テキストにその例が見えます。散歩道の明け方です。フレデリックは至る所にアルヌー夫人のイメージを見ますが、これはまさしく幻覚の場面です。しかし、最終的にはこれは削除されてしまいます。

沢崎 ご指摘ありがとうございます。今後の参考にしたいと思います。

エリック・ボルダス 「黒い太陽」の由来ですが、これは単純にアルブレヒト・デューラーの版画にあると思います。多くのロマン主義者に着想を与えておりますし、ネルヴァルもゴーチエも知っていました。ゴーチエの詩の中に『メランコリア』というものがありますが、ここにもそのモチーフが見られますし、直接的に彼の版画に依拠しています。ロス・チェンバースの著作の中に、『メランコリーと反論』というものがあり、これもこのモチーフを物語としています。

沢崎 「黒い太陽」が死にとらわれた愛人たちの眼に染みついているという例をご存じの方はいらっしゃるかもしれませんでしょうか。ペリーニのオペラ『ノルマ』は、19世紀末のフランス人劇作家アレクサンドル・スーメの作品を翻案したのですが、そのアリアの中にポリリオの眼と太陽を比較したものがあります。

松澤和宏 先ほどのル＝カルヴェーズ氏の発表にも、「黒い蝶」が出てきました。「黒い蝶」に関して、ル＝カルヴェーズ氏からは何かご意見ございませんでしょうか。

エリック・ル＝カルヴェーズ 「黒い蝶」については何も言えませんよ。私は解釈を拒んでいるのですから！

冗談はさておき、おっしゃったことで私が興味深かったのは、私が知らなかった草稿のことです。『ボヴァリー夫人』の草稿において循環する波のようなものというのは興味深いと思います。根本的に異なったコンテキストにおいて現代化できる意味論的もしくは統語論的スキームのようなものが真に見いだせるのです。「黒い蝶」のあとに、かんしゃく玉のように爆発した火花というのがあります。私の転写3、紙葉296を見ていただくと、火を描写するのに、かんしゃく玉のように箱の開口部が爆発したとあります。クリシェの使用というよりも、意味論的統語論的鑄型を採用する同一のスキームの再現化なのです。

セジャンジュール 同じ視点に立てば、太陽の代わりに顔であるというのは、1874年の『聖アントワヌの誘惑』の最後にも見られます。

沢崎 ご指摘の通りですね。これは終結についてのフローベールのイメージであると考えておりました。小説の終結なのではなく、死者の人生の終わりなのであり、太陽の中の顔というのは終結を示すと考えておりました。

セジャンジュール 『ヘロディアス』の最後にも、朝日に向かうバプテスマのヨハネの切断された頭部が出てきますが、これも終結に結びついています。